
俺と半透明な彼女の日常

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と半透明な彼女の日常

【NZコード】

N1465BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

これはどこかの町のどこにでもいるような大学生のお話。

その大学生、名を長門宗助と言うのだが、彼には人には言えない秘密がある。見える人、いわゆる霊能力者と呼ばれるこの世ならざる存在を見て、聞いて、感じることの出来るこの現代では人々が失つた力を持つ希少な存在だった。

そんなある時色々な事情により宗助は亡くなつた祖母から譲り受けたとある屋敷に住む事になつたのだが、まさか新しく住む事になつた家に鎖に繋がれて成仏出来ない幽靈がいるとは予想さえつかなか

つた。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

これは見えちゃう人、長門宗助と成仏出来ない幽霊、葉月のちょ
とした日常のお話

シーン〇 始まりの始まり

俺と半透明な彼女の日常

シーン〇 始まりの始まり

この世には二つの存在がある。一つは普通に生活し人と会話し何かを思いそれに準じて生きている者、もう一つはすでにその役目を終え旅立つべき者であるがこの世に未練を残し、旅立つことが未だ出来ずにはいる者の二通りの存在がいる。

すなわち、幽霊と呼ばれる存在だ。

この者達は普通の人々には見ることも触れることも感じることも出来ない。まだ人間が彼らのことをよく理解しているときにはそれが当たり前だつたらしいが、今ではその力の片鱗すら見ることは出来ない。

しかし、ごく稀にその力を今でも行使することが出来る人間がいる。それを人は靈媒師または、靈能力者と呼び崇め時に恐れた。

今、この話の主人公でもある、長門宗助の前にもそのこの世ながらる存在、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が目の前にいた。宗助もまたこの時代には珍しい靈能力を持つた貴重な存在ではあるが、その宗助はたつた今日の前で起きている現状に困惑を隠せなかつた。

目の前には確かに幽霊と呼ばれる存在がいる。しかし、その幽霊は宗助が今までに見たことがないぐらいに奇妙だつた。

年は16、7ほどの少女、髪は長く腰の辺りまで伸ばされた黒髪はその毛先までもつややかに光っていた。服装は彼らによつて様々だつたが、なぜか目の前の彼女は巫女服を纏い、どういうわけか左足には罪人が着けるような足枷と見た目からして重厚な鎖がついて

いた。しかし、その鎌も足枷からわずか30センチほど伸びて、断ち切られており、すでにその役目を終えていた。

ちなみにではあるが、宗助が困惑しているのはその幽霊少女が原因ではない。もちろん、彼女を最初に見たときも困惑を隠せなかつたが、今の宗助はそれ以上に困惑していた。

「……ところでお前は何をしてるんだ？」

「おはようございます宗助さん。もう少しで出来上がるのもうちよつとだけ待つていてくださいね」

「いやそうじゃなくて……」

宗助はそれ以上言つ気にはなれなかつた。のほほんと返す彼女に対しても、宗助はなんでこんなことになつてているのだろうか？ と首を捻る他なかつた。

幽霊少女こと名を葉月といつ見田麗しい少女（幽霊だが）は鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作つていた。ただ、田の前のそれは明らかに朝食と呼べるものかは疑問だつたが。

「今日はですね～じゃーん！ パンケーキです。おいしそうですね～朝から頑張っちゃいました」

「確かに頑張つたみたいだな。ただ、一言だけ言わせてくれ」

宗助はそつとため息をつきながら田の前の現状に頭を悩ませる。

「いくらなんでも作りすぎじゃないか？」

ダイニングテーブルのそばに置いてある椅子に腰を下ろしながら言つ。テーブルの上に置かれた皿にはパンケーキが乗つかつてゐる。それも一枚や二枚じゃない。軽く見積もつて十枚はある。それも一枚の皿に対して十枚だ。そしてそれがどうやら一人分らしい。

漫画や何かでこんな光景を目にしたことはあるが、実際に田にしてみると、なんといふか……

「えへへ～宗助さんに喜んでもらえて光榮です～」

「……喜んでね～よ」

「あう～？ もしかして量が足りなかつたですか？ ジャあすぐこ

追加を……」

「……朝からこんなに食えるかつて言いたいだけだ。……つたく、家にあつた小麦粉全部使いやがつて。卵も……買つてきておかないとな」

「何を言つですか、糖分は脳を働かせる栄養源としてとっても重要なんですよ。葉月はですね少しでも宗助さんのことと思つてと……」「ああ、そうかい、それはありがとよ。でもな、物には限度つてものがあるんだ。でもなこれはいくらなんでもこれは多すぎだろ」

宗助は朝からげんなりした。どうにも葉月はいつも想像の斜め上をぶつちぎつて行動する癖がある。放置しておくと大抵ろくな目には遭わないことを宗助は彼女とのそんな短くもなく、かといつてそれほど長くもない同居生活で学んでいた。

はあ……と、ため息交じりに何かを諦めた様子で宗助は冷蔵庫からいつもの通り牛乳を取り出すと、キッチンの棚に置いてあつたコップになみなみと注ぐ。幸いにも牛乳だけはなんとか残つていたみたいで、それを飲み干すと低血圧な頭がようやくはつきりとする。横では「ぐす……宗助さんに喜んでもらえると思つて頑張ったのに……」とへこんでいる幽霊一名がいるが、出来るだけ気にしない様にしながらやり過ごそうとする。

しかし……今日の朝食は牛乳だけで済まそつとしている宗助をよそに葉月は目の前に積まれたパンケーキを食べながら「……おいしいです……やつぱりパンケーキはいいですね……ハチミツもたっぷりかかって甘いはずなのに……あれ？ どうしてでしょうか……このパンケーキショッぱいですね……もしかして、砂糖と塩を間違えたでしょうか……ぐす……」と、明らかに宗助に聞こえるぐらいの声で呴いていた。白々しいことこの上ない。そんな葉月に宗助は内心、うぜえ……と、思った。

未だぐすぐすと鼻を啜りながらパンケーキをちびちびと食べる幽霊を横目で見ながらため息一つ、そしてとうとう宗助は観念した。正直に言えば幽霊相手に慰めの言葉なんているのか？ なんて思はしたが、どうせ放つておいてもろくなことにはならない。仕方無

しに頭に手を置いていつものように言つてやる。

「……葉月、俺が悪かつた。そうだな、葉月はこんなに頑張つてくれたんだな。ありがとう。や、俺もパンケーキが食いたかったんだ。冷めないうちに食べようか」

宗助としては大して感情もこもつていなかったの棒読みの台詞を並べ立てただけだったのだが、葉月にとっては効果観面で「あう、宗助さん！　はい、食べるです！」と言つと、葉月はずーんと落ち込んだ表情から一転、枯れた大地に太陽が刺したような顔をするとうキウキとテーブルについた。まさにウキウキウォッキングだ。それを見て宗助は「朝から面倒くせえ……」と、呟いた。

ちなみにだが、この話の主人公でもある宗助がこんな日に遭つてるのは少なからず理由があつた。それを事の始まりなんていうと格好よく聞こえる気もするが、宗助がこんな日に遭う要因となつたことを考えると、実際にはそんなにも格好のよいものではなかつた。今にして思えばあれ自体も何かの陰謀として捉えることが出来るのかもしねり。それぐらいに奇妙だつた。

出来すぎた出来事に関して人というものは必ず何かの理由をつけたがるものだが、今の宗助の日常は側から見れば偶然起きた出来事だおといえる。しかし、どう考へてもやはり何らかの理由をつけたくなる。そんな哲学的なことを思いながら宗助はここに引っ越してきたときのことを思う。

「宗助さん、コーヒー淹れましたから飲んで下さいです」

「ああ、ありがとう」

「どうしましたか？　なんだか難しい顔をされてますけど、もしかして「コーヒーよりも紅茶のほうがよかつたですか？」

葉月は何か自分が粗相をしてしまったような顔をしてあわあわしていった。

「気にするな、別にお前が何かしたわけじゃないんだ。ただ、俺自身こんな目に遭つてるというのに意外と冷静でいられるもんなんだなって関心していただけだ」

「？」

田の前の幽靈は不思議そうな顔をしていたが、気にせずに出されたコーヒーに口をつける。相変わらずこの幽靈のいれるコーヒーは普段自分で淹れるものより美味かった。前に気になつたので美味しい秘密なんかを聞こうと思つたら「そんなの簡単ですよ。宗助さんへの愛がこもっているから美味しいのですよ」なんてことをぬかしてきただのその口は一口中無視を決めこんでやつた。さすがに、葉月も堪えたのか翌日には華麗なる土下座を決めて謝つてきたが。宗助と葉月は一応は同居という形でこの家に一緒に住んでいる。元々は誰も住んでいなかつた家に引っ越してきた宗助だったが、まさか新しく住むことになつた家にこんな変なのがいるとは想像もしなかつた。

宗助は霊能力者だ。とは言つてもこの世ならざるもの、いわゆる幽靈と呼ばれる存在が見える程度のもので俗に言う除霊といった類のことは出来なかつた。それは靈媒師でもあつた宗助の祖母ならば出来たのだが、宗助にはその力は引き継がれなかつた。そのせいで幼い頃からこの世ならざるもの達から度々襲われることになつたり、現世に生きる者達から気味悪がられることも一度や一度ではなかつた。だからというわけではないのだが、出来るだけそういうことには関わらないようにしてきた。それが宗助が幼いなりに身につけた処世術だった。

しかし、やはり宗助に流れる血はそいつた存在を惹きつける何かがあるようで、いつもしてなし崩し的にではあるが幽靈と一緒に住むこととなつてしまつていて。

「お、お帰りなさいませ！」主人様！

「誰がご主人様だ！」

なんて会話にすらなつていないその会話が彼女と交わした最初の言葉だつた。それもなんだか懐かしい思い出のようにも感じる。

「宗助さん宗助さん、今日は葉月が一位ですよ！ なにかいことあるかもです！」

「……そうですね」

葉月はテレビの占いに喜びながら鼻歌交じりで上機嫌にしていた。
これはそんなちよつとだけ不思議な（いや、やっぱり結構不思議な）
幽霊とその幽霊に振り回される主人公のお話。

シーン① 始まりの始まり（後書き）

見えちゃう人の宗助と成仏できない葉月の少しだけ非現実的な日常をお楽しみください

シーン1 未知との遭遇

シーン1 未知との遭遇

「……本当にここで合ってるのか？」

男は心配そうに呟いた。

手にはこの情報社会にとつては「ヨミグズ」以下の代物でしかない地図（小学生にはじめてのおつかいをさせるために母親が書いたような地図あまりにも簡略しすぎて地図とは呼べない）とこの家の鍵が握られていた。

辺りを見回せば建てるのに一体いくら位かかるのだろうか？　と言いたくなるようなわゆる、豪邸と呼ばれるような大きな家がそこら中に乱立していた。

高級住宅地ということもあり、大きな塀とその中にいる大きな犬、どこの国の車かは知らないが明らかに高級車だと見た目でわかる車が何台も止まっている豪邸をいくつも見る。あるところにはあるんだなど関心しつつ、この国の富裕層と貧困層の格差を見たような気がした。

それにしても……だ。

「確かに屋敷と言えば聞こえがいいが……これは……」

彼の目の前には確かに高級住宅街らしく、それなりに大きな家が建っていた。そう、大きさだけでいえばの話だが。

無論に大きな塀には絡みついた薦が塀を覆いつくし、広々として綺麗だった庭は放置されて草が生え放題、真っ白い家は風雨にさらされたせいで白というよりは灰色に近い色に変化していた。

一言で言えば、廃墟。または幽霊屋敷というのがぴったりな外観だった。

「幽霊屋敷だよな……」

天の声が聞こえたのかどうかは定かではないが、どうやら彼、この話の主人公長門宗助も同じ思いだつたようだ。

「……今ならまだ引き返せるか？」

そんなことを思いはしたが、残念ながら今の彼にはその選択肢はなかつた。

宗助がこの古ぼけた屋敷にやつてきたのはある理由からだつた。

先日、宗助の祖母が亡くなりその際に財産分与が行われた。生前、宗助の祖母は残された家族に遺言を残しており、孫である宗助にはなぜかこの屋敷が与えられたのだった。

当初、宗助はこの屋敷を相続するのを断ろうと思っていた。しかし、この屋敷が建っているのは偶然にも宗助が通う白峰大学の近くなのと、実家に帰つていた際に借りていたアパートが全焼してしまったという不幸が重なつたために仕方なくこの屋敷に住むことになつたのだった。

話に聞いていたときはちゃんと管理してある屋敷といつことだつたが、実際に実物を見ていなかつた故の多少の不安はあつた。しかし、これはその多少の不安というものを遥かに逸脱していた。

しばらくの間逡巡を繰り返していたが、ついに意を決したようで塀に備え付けられる鉄格子をそつと押すと、錆びて朽ち果てる割にはすんなりと開いたことに驚きながらも中に入つていつた。

塀から家までのわずか數十歩のところには石畳が敷かれており、この住宅が元々はそれなりに素晴らしい住居だつたことを感じさせた。石畳のおかげで草をかき分けながら進むということはなかつたが、外観から見てもあまりよろしくはない。どうやら草むしりをするのは必至だつた。

家のドアの前に立つと、ドアには何かの装飾だらうか？あまり芸術だとか美術的センスはない宗助にも匠が彫つたとわかるような彫刻が施されていて、この家の元々の高級感（今は見る影もない）を感じさせていた。

ポケットから鍵を取り出すとそれをドアノブの下にある鍵穴に差

し込む。鍵自体も年代物のようで今の「」時世それこそプロの方ならわずか瞬きする間に開けてしまいそうなくらいにセキュリティーとは縁遠い構造だった。

力チヤ、と小気味のいい音とともに長い間かかつて封印を解くかのように鍵が開錠される。ギイイイ、立て付けの悪い建物のような音を出しながらドアを開くと中は埃塗れの様相か？ と想像していた宗助の予想を見事に裏切り、意外にも中はとても綺麗に掃除されていた。

それこそ、ついさっきまで誰かが住んでいたかのように……。

一抹の不安を、持ちつつも中に踏み入れる。広々とした玄関は、靴を脱ぐスペースというものがないらしく外観同様洋風の家にといった造りとなっていた。日本人である宗助には靴を脱いで入る習慣があつたため、やや戸惑い気味ではあつたものの、初めてに入る家に靴を脱ぐのも嫌だと思っていたのでこれはこれで都合がよかつた。

玄関からまず最初に見えるのは広々としたロビーのような場所だつた。一軒家なのにロビー？ なんて思つたが実はそこがリビングルームだつた。備え付けられたソファーアーは革張りで、どこかが破けているなどの欠点もないただただ綺麗に手入れをされているものだつた。

さすがに電化製品なんかの類はなかつたが、家具なんかはそのまんまになつてゐるようでソファーアーの他には大きな古時計とちょっとした机が置いてあつた。それらもソファーアー同様、壊れているとか埃が被つているということもなく、いたつて綺麗に手入れされていた。吹き抜けになつてゐるリビングの天井は高く、そこからベランダのようになつてゐる一階部分の部屋らしきドアが三部屋分見えた。

改めて、この家の見取り図を眺めるとよくわかるが、宗助が今いるリビングからさらに奥に進むと、ダイニングとキッチンがあるらしく、その横には風呂とトイレが備え付けられていた。そのダイニングから別の通路がありそこに対面するように一つの部屋が設けられていた。広さはいずれも六畳とまるで使用人の部屋のような造り

になっていた。

部屋の中には作業机とクローゼット、それとベッドが同じ配置でそれぞれの部屋に置いてあった。わかりやすく言えばビジネスホテルの部屋のような感じだ。

吹き抜けになつてゐるリビングから一階に上がる階段があり、そこから上に登るとリビングが一望できる。そして、そこに等間隔で並ぶ部屋があり手前から十畳の部屋が一つと一番奥の部屋が二十畳となかなか広い部屋になつていた。

十畳の部屋には同じくベッドと机、クローゼットがありここも下の部屋と同じように最低限生活に必要な家具が揃つていた。違うとすれば部屋の広さぐらいなものだつ。ちなみに一階、一番奥の一十畳の部屋はどうやら書斎だつたらしく、窓際にはゆつくりと腰を落ち着けて本を読むための机とイスが置かれており、壁一面に置いてある本棚の中にはぎっしりと詰まつた本があつた。ちなみになんでこんな場所にあるのかは不明だが、正しいメイドのあり方、ご主人様とのお付き合い第一章～第十三章、お兄ちゃんと呼ばせて、尽くす女になる！…なんて誰が読んでいたのかわからない本が、厚みがあり羊皮紙や革張りの装丁といつたかなり高級そうな古書と同じように並んでいた。補足だが、ご主人様とのお付き合い第一章～十三章の間の第八章だけがなかつた。誰かが持ち去つたのだろうか？

「まさか、な」

宗助が言つたまさかといつのは先日亡くなつた祖母のことだ。さすがにそれはないと思うが……。

一通りぐるりと回つてみたがどこもおかしな点はなかつた。電化製品のほかにガスコンロや食器などのいわば消耗品に近いものはなかつたが、机やベッドなどの大事に使える家具はまるで宗助の為に用意されていたかのように置かれていた。それもまともな姿かたちで。

管理されていた。というのは宗助がこの屋敷を相続した際に聞いていた。だから、家具なんかがちゃんとした形で残つていたのはわ

かる。しかし、不思議なのは管理している人間がいるならば、外の状況はどうだろうか？

ちゃんと管理しているならば外の庭だつてきれいに掃除されてもおかしくはない。

それにおかしなことはそれだけではない。

「……なんで管理している人間がないんだ？」

何気なく思ったことだったが、どうにも不自然すぎる。家族はこの屋敷の存在のことはよくは知らないようだった。祖母が残した遺言には“この屋敷には管理している者がいる。詳しくはその者に聞け”としか書かれていなかつた。鍵はその遺言とともに残された。

鍵は宗助が持つている一つしかない。

では、誰がこの家の管理をしている？

「……どういうことだ？」

ますます謎は深まるばかりだった。

考えていても仕方ない。とりあえずはこれから的生活に必要なものを買い揃えなければならない。それに外の草むしりやこの家の掃除も必要だ。中のほうはきれいに掃除されているが、外のほうは手付かずだった。

「さて、と」

そうと決まればあとは動くだけだつた。まずはこの家の管理人を探すことによう。

宗助はこの家に入ったときから薄々と感じていた。この屋敷に存在する管理人の存在を。

「おい、この家にいる管理人とやら、俺の声が聞こえるか？　俺は長門宗助、長門雪の孫にあたる人間だ。俺の祖母さんは先日死んだ。それで俺がこの家に新しく住むことになつた。もし聞こえるなら姿を現してくれ」

誰もいない家に宗助の声だけが響く。側から見れば何をしているのか？と言われそうだが、宗助には人には言えない秘密がある。

この世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在を見て彼らの声を聞いて彼らの存在を感じできる能力。普通の人間には備わっていない能力を持つもの、霊能力者だった。

宗助がこの世ならざるものとのコンタクトを図れりつとしたが、相手のほうは聞こえているのかどうか知らないが、宗助の呼びかけには答えなかつた。代わりにパシイ！ という派手なラップ音が返事の代わりと言いたげに鳴り響いた。

「そうちが、そうちがその氣なら構わない。ならば俺にも考え方がある」宗助は仕方ないと首を振ると一目散に一階のとある部屋へと駆け上がつた。

「コンコン」と念のたドアをノックする。もちろん相手から返事などあるはずがない。

「結構強情な奴だな。ま、幽霊の考えてることなんか俺にはわからないし、わかりたくもないがな」

一人呟きながらドアのノブを捻る。

「やっぱり開かないか」

ここは先ほど宗助が家の中を探索していたときに唯一、ドアが開かなかつた部屋だつた。そして、先ほどから感じている気配もこの部屋から強く感じられた。

となれば、管理人とやらがいるのはこの部屋しかない。

に、してもだ。鍵がかかっている部屋にどうやって入るうか？ 幽霊などの類であれば鍵がかかっていようといまいとドアをすり抜けて入ることが出来るが、宗助には無理な話だ。いくら霊能力者だといつても、自身が透明になれるわけではない。

外側から窓を突き破つて進入するか？ バカを言え。そんなのは映画の世界だけで十分だ。ましてや、引っ越してきて早々、家の修理なんてまっぴらごめんだった。

「……と、なると」

後の答えは簡単だつた。

ドンッ！！

「ちいっ、そんな簡単に開くわけないよな」

体当たりだつた。

「の世ならざるもの達が見える宗助ではあつたが、別に変身出来るわけでもないし、ましてやす「い技が使えるわけでもない。幽靈が見える以外は「く普通の一般男性なのだ。

何度かドアに体当たりを仕掛けてみるが、ドアはびくともしない。いくら頑張つても開かないドアに苛立ちを覚えながらもう一度と思い体を起こすが、次第に体力は限界に近づいていた。

ハア、ハア、と息を切らせながら、ふらふらする足をなんとか気力で立たせドアの前に立つ。

「ふう よし！」

宗助は柵ぎりぎりまで下がるとこれで最後とばかりに開かずのドアへと突っ込む。

と、その時だつた。

「……うーん、さつきからどうどんといふのさこですか」「な！？」

「え？ ひや「うーーー」

眠そうな声が聞こえたと思つたらさつきまでびくともしなかつたドアが開いた。しかし、車は急に止まれない。という言葉をその身体現しているような勢いの宗助はその勢いを止めることがなく……

「……いつつ」

そのまま中にいた人物目掛けでダイブすることになつてしまつた。ゆつくりと体を起こすと、宗助の体の下には謎の美少女がいた。艶めく腰まで伸ばされた黒髪、陶磁器を思わせるような、かといつて病弱とまではいかないぐらいの白い肌、見た目は小柄でなぜか巫女服着用。見た目はどこからどう見ても日本人らしい容姿をしていたが、その姿は半透明だつた。

明らかにこの世ならざるもの、つまりは幽靈と呼ばれる存在だつた。

「おい、大丈夫か？」

「……う、ううん」

幽靈相手に大丈夫か？ もなにもないのだが、このよくわからぬ状況に気が動転してしまつて、宗助はあたかも生きている人間相手に接するように話しかけていた。対する少女は気を失っているのかうなされているように声をかすかに漏らしていた。

「……どうやら問題はなさそうだな」

少女を押し倒しておいて問題がない訳ないはずなのだが、これは不慮の事故だと思うこととして片付けることにした。

しかし、このまま放置しておくのも後味が悪い。いくら幽靈とはいえ女の子だ。宗助は未だに目を覚まさない少女を抱えあげるとそのまま部屋の中にあつたベッドの上に寝かせることにした。それにしてもここは一体？

宗助は少女がいた部屋の中をぐるりと見回してみると、部屋の中にはベッドのほかに机、クローゼット、テレビ（ちなみに薄型でデジタル放送対応だった）などもろもろ生活用品が用意されていた。机の上には書斎にはなかつたご主人様とのお付き合い第八章が置いてあった。どうやらこの部屋にいた少女が読んでいたようだつた。ベッドの上には女の子の部屋らしくぬいぐるみやふかふかした枕が置いてあつた。カーテンも発色のよい薄いピンク色でここが改めて女の子の部屋なんだと認識させられた。

だが、非常に残念なのは、初めて入った女の子の部屋が幽靈の部屋で、ましてや部屋に入ろうとドアに体当たりをかまし、なおかつ事故とはいえ女の子（幽靈だが）を押し倒してしまつという裁判にかけられたなら間違いなく有罪確定の行為をしてしまつたことだつた。

ひとしきり部屋の中を物色していると、ベッドに寝ていた少女が少しむずがるような仕種を見せた後、その閉じられていた瞳をゆっくりと開いた。

「ん、起きたか」

宗助の言葉に少女はひとしきり口をぱちぱちさせ、ガバッと起き上ると一言、

「お、お帰りなさいませ」「主人様！…」

「誰がご主人様だ！…」

「あうう……ご主人様ではないとすると旦那様でしょうか？」

「……俺はいつからそんなに偉い人になつたんだ？」

「じゃあお兄ちゃん？」

「……生憎と俺は一人っ子だ」

なんだか突つ込むのも疲れてくる。それよりも言つことが山ほどあるはずだ。

「というか、知らない男が勝手に自分の部屋に入り込んでたら普通は不審がらないか？」

「え？ あ……ど、どちら様でしようか？」

「……お前は顔も知らない相手にご主人様と言うのか」

なにやら論点がかなりずれてきているが、この際気にしないでおこう。気にするとますますややこしくなりそつだからだ。

やれやれ首を振るとため息を吐きながら宗助は自己紹介を始めた。正直、宗助の疲労はこの時点でピークだった。

「俺の名前は長門宗助。今日からここに住むことになった

「あう、長門……宗助さんですか？ となると雪さまと何か関係が？」

「ああ、俺は祖母さん……長門雪の孫にあたる。ちなみにだが俺の祖母さんは先日死んだ。その時に財産分与で俺にこの屋敷が与えられたというわけだ」

「そうですか……。雪様がお亡くなりに……」

目の前の少女は宗助の祖母の死を悲しむと手を合わせてその死を悼んだ。内心、幽霊が死んだ人のことを悼んでビーッする！？ なんて思つたが、この際ツツコミはなしだ。

「で、俺の自己紹介が終わつたところで聞きたい。お前は誰だ？」

「あう！ そ、そうでした。自己紹介がまだでした！ 初めまして

です！ 葉月は、葉月は……ええ、と……誰でしょつか？」

「知らねーよ……」

「さ、記憶喪失です！ どうしましょつか！？」

「……どうしましょつか」

ピーコ克だった宗助の疲労は今や限界突破を果たしすでにクライマックスへと突入していた。

「……というわけです」

「……というわけって……何も説明してねーだろーがあ……」

宗助はなぜか部屋に置いてあつたちやぶ台をひっくり返して叫んだ。

「ひいい！ だ、だつて、本とかには「……といふことだ」とか「かくかくしかじか」とかで通りますですよ。なのにこの世界ではそれが通じないですか！？」

「世界言つな。生憎となこの世の中はそんな『都合主義でなんか出来ていないんだよ。で、だ、そんなことはどうでもいい。それよりも、お前は一体誰なんだ？』

「あうう……先ほども言いましたですが自分が何者なのか覚えていないんです。一応、名前としては葉月という名前を雪様から頃きました。それ以上のことはなんにも……」

「ふーん、ま、説明はかなり不十分だが大方のことはわかった。それでお前がここにいる理由はどうしてだ？」

「それが……」

と言つて葉月は自分の足についている足枷を見せた。

「それは？」

「……これが何なのか葉月にもわかりませんです。気がついたときには足にこれがついていましたから」

葉月の足についている足枷は見るからに重厚で簡単には外れそうには見えなかつた。足枷から伸びる鎖はどこにつながつているのかはわからないが、とても長くその先は壁の向こうまで続いているよ

うだつた。

「雪様がこのお屋敷をお建てになつたときから葉月はここにいます。最初、雪様は葉月をなんとか成仏させようとしてくださいましたがこの鎖があるから葉月が成仏出来ないとおっしゃっていました。それに鎖のせいでこの屋敷から出ることさえも叶いませんでした。それを知った雪様は葉月のこの鎖を解こうと尽力をつくしていただきましたが、雪様でもこの鎖を解くことは出来ませんでした。それで行く宛てのない葉月を雪様はここに置いてくださいたということです」

葉月は宗助がひっくり返したちやぶ缶を直しながら話を続ける。「雪様は記憶すら失つていた幽霊の葉月をとても大事にしてくださいました。この世の中のことを話していくださつたり、自身の話もしてくださつてそれは楽しいひと時でした」

葉月は遠い記憶を懐かしむような顔で話していた。宗助はそんな葉月の横顔を眺めながら不謹慎にもその横顔を美しいと思っていた。つて何を考へてるんだ俺は……。出来るだけ葉月に悟られないよう顔を背けながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「しかし、雪様がお亡くなりになられたとは……先日、雪様が葉月にお別れを告げに来たと言わた時はどうにつけとかわかりませんでしたが、そういうことでしたか」

「……大往生だった」

「……きっと最後まで笑つておられたんでしょうね」

「……ああ、最後まで笑つていたよ」

宗助の言葉に「そうですか」と呟くと、葉月は鎖をチャリと鳴らしながら宗助に代わりのお茶を出した。

「それでお前がここ家の管理人をやつているつてわけか

「はい、雪様は大事な用があるからといつてこの家を離れるようになりました。その時ですが、雪様はこんなことをおっしゃっていました。“いつになるかはわからないけど、そのうちあなたを成仏させてやる人間が現れる。その時にはそいつとよろしくやりな”って

「どうこうことでしようか?」

「……あんのババア」

そういうことか、これでなんとなくだが全ての辻褄があつたような気がする。つまりは……。

「してやられたってことか」

「?」

「いや、気にするな」

諦めたように呟くと宗助は葉月の淹れたお茶を飲んだ。
案外、美味しい。幽靈の淹れるものだからと不安を隠しきれなかつたが、正直、自分で淹れるものより美味かつた。

「それでなんですけど……」

「ん? なんだ?」

「えと、あなた様のことなんとお呼びすればよろしいでしょうか?」

「どうこうじだ?」

「雪様が葉月にお別れを告げに来た際に“近いうちにそこに新しく住人が増えるからその時にはそいつの世話ををしてやってくれ”と言われまして、その方のお世話をするということは私のご主人様になるということですから、お呼びするときは『ご主人様がよろしいのかと思いまして。もし、『ご希望であれば』那様やお兄ちゃんとお呼びすることも出来ますですよ。葉月はその為に勉強しましたから”なんの勉強だ!? とは聞かなかつた。机の上においてあつたご主人様とのお付き合い第八章を見れば大体のことはわかつたからだ。

「……普通に宗助でいい。様付けもいらない

「では、宗助さんでよろしいでしようか?」

「ああ、それでいい

「わかりました」

言つと、葉月は深々と頭を下げて一言、

「ふつつかものですが、今後ともよろしくお願ひします。宗助さん

「……」

「いやして、宗助は葉月と出合つた。

「の先、葉月と出合つてしまつたせいで宗助の身に色々な災難が降りかかるが、」の時の宗助はそんなことまだ知る由もなかつた。

「それでは、まずは」主人様に「奉仕を……」

「何のご奉仕だ!!」

宗助のこれからは前途多難なようだつた。

「宗助さん、洗濯物が溜まつていたら出しておいてくださいね」

「宗助さん、お台所の洗剤が見当たらなかつたので帰りに買つてきてください」

「宗助さん、今日は和食と洋食どちらがいいですか?」

「……なんだこれは?」

宗助の胸に去來したものはこの現状がよくわからないと「」ただけではなく、どうして「」になつたのだろうか? といふ疑問だつた。

のんびりとした朝、いつものように規則正しく目覚め「ふわああ」とあぐびをしながらリビングのある階下に降りてみると可愛らしいフリルのついたエプロンを着用した(巫女服は標準装備)葉月がパタパタと走りながらもとい、走つているように浮かびながら忙しく働いていた。

「あ、おはよう!」宗助さん

「おはよう、葉月」

なぜかエプロンを纏つている葉月にそれをどこから用意したんだ? と言いたいのをぐつと堪え軽く朝の挨拶を終えると、「」丁寧にテーブルの上に置いてある新聞紙に手を伸ばす。

「相変わらず世の中は平和だな」

そんなことを呴きながらのんびりと朝のひと時を過ぎる。すると、

「ふん、ふふん、ふーん」

とても機嫌な様子で葉月があちこちあちこちへと駆けていた。

「……」

新聞を読む手を止め、テレビのリモコンに手を伸ばし、いつものよつこにテレビを点ける。テレビの向こう側では雨の中だというのに満面の笑みを浮かべたお天気キャスターが元気にリポートしていた。

「あっちも元気ならこっちも元気だな」

聞こえたのか聞こえていないのか知らないが葉月は「忙しいですね～」と言いながら家事に精を出していた。

どういうわけか葉月は幽霊のくせに物に触れることが出来るらしく、雑巾を片手に窓をきれいに磨いていた。宗助の田の前では掃除機が勝手に動いていて、奥のキッチンでは包丁やら食器類が浮かびながらまるで意思を持つているかのように自由自在に動き回っていた。

一言で言えば童話とか絵本の中の世界、現実において考えてみればそんなことが起きるわけはないし、あたとしてもせいぜい掃除機が勝手に動くぐらいのものだ。

葉月は自分の能力、つまりはポルターガイスト現象を使って家事をしていた。

こんなもの他の人間に見られたなら発狂するか、靈媒師を呼ぶかするものだったが、とりわけ宗助はこいつたことに馴れており、それを実行している人間も目の前で忙しそうにしているのを見ているため別段何かを言うようなことはなかったが、やつぱり現実にこういうことを行われると正直どう対処していいものか、という気持ちになつた。

「宗助やーん、早くしないとじ飯冷めちゃいますよ～

「あ……ああ……今行く」

と宗助を呼ぶ声が一つ、のつそりとソファーから立ち上がるとダイニングに向かう。その間にキツチンのまづから腹の空くようない匂いがこれでもかといふぐりいに漂ってきていて余計に鼻腔をくすぐる。

ぐう、となるお腹はとても正直で腹が減つていては戦が出来ぬと

「ということを体で表してくるかのようだつた。

それにしても、どうしてこうなつたのだろうか？

まあ、一言で言つてしまえば自分で同居を認めたのだから彼女に文句を言つるのはお門違いだとこうものだ。それは頭の中でわかるのだがそれでもこんな新婚さんみたいな状況になるなんて思つても見なかつた。

「宗助さん、今日はいい天気になりますね」

「……」

「あ、宗助さん、今日は腕こよりをかけて作つてみました」

「……」

宗助は黙る他無かつた。

とりあえず、文句といつか言いたいことは山ほどあつた。ただそれを言つてしまつと機関銃のように溢れ出るのは一日瞭然なのと、せつからく作つてくれた朝ごはんが冷めるのがいやだったのも手伝つてそれを言つのをぐつと堪えた。

が、

「はい、宗助さんはご飯これぐらいでよかったです？」

「……ああ」

何気なく返事をしてしまつたがそれを流してしまつほど宗助は甘くは無かつた。

「なあ、ちょっとといいか？」

「はい、なんでしょうか？」

「色々といいたいことがあるんだが、きっとそれを言つとカリガ無いから敢えて一つだけ言わせてくれ」

「はい？」

「何やつてんだ？」

「え？ 『ご飯を盛り付けてますど……あ！ も、もももしかして、朝はパンのほうがよかつたでしょうか？』

「いや、俺はご飯派だ。じゃなくつて、なんでこんなことをしているんだ？」と俺は言いたいんだ

「え？ 何か粗相をしましたでしょうか？」

「粗相もなにも、お前は幽霊だろ。なんでこんなことをしてるんだ？」

その宗助の質問に葉月は返答に困つてこらめいた。

「第一、俺はこんなことをしてくればと頼んだ覚えはないし、される理由も無い」

「はううう……」

葉月は田に見えてわかるほど落ち込んで見せた。そんな姿に少し罪悪感を覚えはしたもの、それでもなんでこんなことをしているのかがまったくわからない以上追求の手を緩めることは出来なかつた。

「何でだ？」

出来るだけ優しく言つてこるつもり（本人はそう思つている）だが、側からみればどこからぞ見ても一方的に尋問しているようにしか見えない。

「……宗助さんほんとうのはこやですか？」

「は？」

「いえ……せつかくほしてお側に置いていただいているのに何もしないわけにはいかないと思いまして、こうして宗助さんの身の回りのお世話をさせていていただく」と繰返しをと思いましてです

「（）恩もなにも成り行きでこなつてこるわけなんだから別に普通にしてもいいと思う。それに俺はこういうことをされなくとも大抵のことは一人で出来るし、お前だっていやだろ？」

「え？ い、いえそういうことはないですけど……」

「俺の祖母さんが俺の為に世話をしてくれって言い残したのかもしれないけど、別に俺はそこまでしてもらうことはない。それにお前との付き合いでその鎖が外れるまでだしな」

「そうですか……」

殊更寂しそうに宗助の（）飯をそつと置くと葉月はその場だけに影

が差したかのよつよずーんと牆へなつた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「あのや」

「……はい」

「セレードやんな風にわれてこるど！」飯が食べ辛いんだが……」

「……いえ、葉月のことは放つて置いてください。葉月のことないものと思って食べてください。あ、でも、幽靈なんだから最初からいなこも同じですよね。あははははは……」

「……」

すず、と味噌汁をすする音だけが響き、この場が明らかに尋常じやないくらいに静かだということを知らしめられられる。

葉月は葉月で「葉月なんてただの幽靈ですか。……気にしないで下さー……」「じぶつぶつ呟いているし、対する宗助は出来るだけ気にしなこよつに」飯を黙々と食べようとする。

そうするとこと五分、もちろん、一人の間に会話なんて無い。

宗助は温かいご飯食べながら思った。

面倒くせえ……と、

しばらくお互に黙つていたが、この現状に耐え切れなくなつた宗助が觀念したかのように首を振つた。

「ああ、わかつた、お前のしたいようにすればいい。俺もこれ以上は何も言わない。ま、お前とのこの生活もその鎖がなくなるまでだ。それまでは好きにすればいい」

「ほ、本当ですか！？ 宗助さん！？」

「ああ、だが、その鎖がなくなるまでだからな！ わかつたか？」

「はい！」

どこからどう聞いてもふきらぼうな言い方にしか聞こえない言ひ方だつたが、葉月はそれをまったく気にすることも無くぱつと顔

を上げるとまるでお日様が差したかのよつて明るい笑顔を取り戻していった。

本当になんか調子狂うな……。

宗助のそんな思いは温かい味噌汁と炊き立ての「」飯を前にすると知らぬ間にどこかへ消えてしまった。

シーン2 Gショック～黒いあいつの襲来～

シーン2 Gショック～黒いあいつの襲来～

なし崩し的に始まつた葉月との生活だつたがこれが大変だつた。
葉月はどういうわけか幽霊のくせに怖がりなようで何かあれば「宗
助さん！」と飛んでやつてくるのだ。それも泣き顔で。

その度に今度はなんだ？と思ひながらもその重い腰をあげる。

「そーすけさーん！！ 助けてください！！」

「……今度はなんだ」

リビングのソファーに腰をかけて平和な日常を過ごさうとしてい
た宗助だったが、今日もやつぱりか……と言いたげな顔を浮かべな
がらゆつくりとその重い腰をあげた。毎度のごとく同居人である幽
靈がどたばたと騒ぐのも宗助にとってはもはや日常になつてしまつ
た。

「宗助さん宗助さん！ 奴が出ました！ 奴が……奴があ……」

「あううー」「つるわーー」

絶対に美少女がしてはいけない顔をしながら、全力でこちらに向
かつてこようとするのを脳天割りで制する。それにしても、こいつ
うときばかりはこの力も捨てたものではないなんて思つ宗助だった。

「そ、宗助さん……葉月のことお嫌いですか？」

「もう少し言動がまともなビジネスマンに対するぐらこの興味は持て
るかな」

「……じゃあ今はどのぐらいの興味なんでしょうがね

涙目で抗議していく幽霊を無視しながら話を戻してやる。

「……で、何が出たんだ。幽霊か？」

「あー！ 幽霊さんが他にもいるのですか！？ ビーですか、ビー

にこるのですか！？ それならば一刻も早く成仏していただかなくては！ なぜならば、他に幽靈さんがいらっしゃると葉月が宗助さんとキャツキヤウフフ出来なくなつてしまつです！！」

「……まあはお前から成仏させたほうがいいよな絶対！」

宗助は一気にげんなりした。しかし、放つておいてもろくなことにならないことを既にその見に感じている宗助は、じたばたあたふたと忙しそうに動き回るバカを制するとなつやく本題に入ることが出来た。

「それで朝から騒々しく騒いでいるけど一体何があった？」

「ああそうでした！ こんなところでキャツキヤウフフしてくる場合じやありませんです！ 出たんです奴が！」

「ああ、わかった、わかったから離れる！ 顔が近い顔が！」

「こちらがわずかでも隙を見せようすれば田の前の幽靈は一気にこちらへと接触を図るうとしてくる。それはまさに乗り移つてやろうかあ！？ とでもいいたげなぐらいの勢いでちよつとばかり怖い。慌てふためく葉月をなんとかなだめ、深呼吸するよつにすすめる。「はあ～、ふう～、はあ～、ふう　「じほつじほつ……すいません……むせました……」

「……深呼吸も落ち着いて出来んのかお前は……」

ジト目で横の幽靈を見やる。よくやく落ち着いたよつで呼吸を整えていた。少なくとも、幽靈に深呼吸が必要なのかどうかは怪しいが……第一、すでに死んでるし。

そんなことをどうでもこっこことを思ひながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「宗助さんと話していると時間が経つのも早いですね～」

「……お前が話をややこしくしてゐるんだろうが。で、何が出たんだ？」

？」

「Gです！ Gが出たんです！」

「ああ！ だから顔が近いって！」

グイグイと顔を寄せてこようとするのを必死で引き剥がしながら

話の続きを促す。

「とにかくいつてなんだ？」

「……Gとはかつてこの世界に降臨した悪の帝王です。その姿は漆黒の闇よりも黒く、その理想的な体つきはいかなる狭い場所にも入り込むことができ、その脚力はどんなアスリートよりも早く、その動きで歴戦の勇者たちの攻撃をかわし、なおかつその圧倒的な存在感で相手に戦う気を失わせる。そして極めつけは飛びます！ 奴は自身の身に危険が迫つたときにその身をもって体当たりをかましてくれるんです！」

「……つまりは『ゴキブリ』が出たつてことか」

「ああああ！ 宗助さん！ その名を、その恵まわしい名を口にしないではいけません！ こうしている間にも奴は葉月たちにどんな攻撃を仕掛けてやろうかと虎視眈々とその機会を窺つているはずです。ほら、今もその隙間からこちらを窺つているに違ひありません！」

「だからなんで寄つてくるんだ！」

軽く小突きながら引き剥がしてやる。葉月が密着するたびにそのなんていふか柔らかいものが……ふにふにと当たつて……なんともいえない気分になりそうになる。つーか、幽霊のくせになんでこんなに柔らかいんだろうな……。

「宗助さん、これは我々人類と奴らとの戦争なんですよ。生きるか死ぬか一つに一つ。奴らを倒さなければ我々に未来はないんです！」どうでもいいことをもつともらしく講義するが、どうにもバカらしくて聞いていられなくなる。たかが、ゴキブリ一つで何をそこまで……。

「んで、どこにいるんだ？ その『ゴキ……じゃなかつたGとやらば』危うく奴の名を出してしまつといろだつた。ここで奴の名を出してしまつたらまたこの面倒くさい奴が騒ぎ出すかもしれない。そう思つと迂闊に名前を呼ぶことさえ憚られた。実際に危うく名前を呼びやうになると葉月にキッと睨まれてしまつた。そこまで怖いのだろつか……。

「Gはですね今キッチンの冷蔵庫の奥に潜んでいます。先ほどお料理をしようつて近づいたら奴がその後ろに隠れるのを見ましたですから」

「ふーん、となるとGをおびき出れないといつて倒せないとか」「ええ、奴はとても狡猾で中々姿を現さないです。なにより人の気配に敏感で人が来たとわかると一目散に隠れてしまいます。ゲームに出てくるメタル系モンスターよりも厄介です」

「まあ、メタルなんとかを倒せば経験値が跳ね上がるんだろうが、生憎とGを倒しても大した経験値は手に入らないと思つぞ」「それはわかつています。しかし、葉月にとつては経験値よりも奴がこの家に存在していることが我慢ならないのです！」

葉月にしては珍しく攻撃的な発言だと思つた。何がそこまで彼女を奮い立たせるのだろうか。

「ま、それはいいとして、対策はあるのか？」

「はい、それは抜かりなく。これをご覧下さい」

そう言って一つの紙を取り出した。いや、正確には紙といつよつは紙の束だった。

「これは？」

「新聞紙ですよ宗助さん」

もはや質問するのもどうかと思うが、何も質問したのはその物体に対してもない。それで一体何をしようかといつことに疑問を感じたのだ。

「いや、それは見ればわかる。見たまんま新聞紙だな。そういうなくてこの新聞紙を使って一体何をしようつていうんだ？」

「え？ いやですね～宗助さん。これは奴らと戦うために作り出された兵器、つまりは我々にとつての希望になるんですよ」

「……希望？」

「うーん、よくわからない。まあ、ここでの戦いとはこつもよくわからないことばかりなのだが、今回ばかりは輪をかけてせつぱりだつた。

不思議そうな顔で見る宗助を置いて葉月はその新聞紙をぐるぐると丸めだした。

「出来ました！」「これが我々の切り札、SBS - 01です！」

「なんかものす」／＼格好いい名前だな！」

ババーンと効果音がつきそうなくらいにSBS - 01（新聞紙一冊の略らしい）高々と掲げ威厳たっぷりにポーズをとつていた。その姿はまるで勝利の女神が旗を掲げて民衆を引き連れているあの有名な絵画のようにさえ見える。

「で、そこからどうするつもりだ？」

「……」

掲げたまま固まっている葉月。もしかして、この後の展開をまったく考えていなかつたのだらう。ま、普段の言動があれな葉月ならありえる。そう思つてため息をついた。

しばしの逡巡の後、葉月は「どうぞ宗助さん」と、いやいやしきSBS - 01を宗助に手渡してきた。

「……どうこういとだ？」

「それはですね、宗助さんにGを退治する重大な任務を『与えよ』と思いまして」

「……だからってなんで俺なんだ？」

「……えへへ、だつて怖いんですけどの」

すば ん！！

「あううー！」

ゲームだつたら間違いなくクリティカルヒットものの一撃を繰り出してやる。材質が新聞紙で出来ているせいか、一撃を繰り出したときのヒット音がやたら小気味よく感じられた。

「何言つてんだ！お前が用意したんだつたらお前がやれ！」

「後生です！後生ですからーなんとか葉月の、いえ、人類の平和をなんとか守つてくださいーーー！」

「スケールがでか過ぎんだよーなにゴキブリ一つでそこまで怖がつてんだよー！」

「ああああ！ 宗助さんその名を口にしてはあ……」

飛びついてきた葉月に反応できず、そのままなだれ込むようにして床に転がってしまった。それはまさにアクション映画なんかで敵の攻撃をかわそうとして仲間を助ける主人公のような動きだったが、実際にはそこまで格好よくはない。

その拍子に葉月とかなり密着してしまってさつき迫ってきたときよりも顔が近かつた。それはもつあと数センチでお互いにが触れ合ってしまううぐらいの距離だった。

「…………」

お互に自分たちの置かれている状況を理解し、どうせに離れる。そして何事もなかつたかのように振舞おうとするのだが、どうにも心臓がバクバクと鳴つていてどうしようもない。

「…………そ、それでですね……引き受けもられますでしょうか？」

「え……あ、ああ……わかった。何とかするからお前はビニカ安全な場所で待つてろ」

「はい…………」

なんか微妙な空氣のままよそよそしく距離をとる。

……なに意識してんだよ俺は。なんとなく自分で自分で自分を殴りたくなつた宗助だつた。

「えーっとそれでどこにいるんだ奴は」

独り言を呟きながら宗助は今や戦場と化したキッチンへと足を踏み入れる。

ゆつくつとゆつくりと、自分自身の気配を最大限に殺しながらGが潜んでいそうな場所へと向かつ。

片手にはSBS-01、葉月いわく人類が奴に対抗できる最後の希望らしい。

「…………それでも面倒なことになつたな」

やれやれと頭を搔きながら宗助は自分の甘さに落胆しそうになる。

一つだけ反論させてもらうが決して葉月とあんなことになつたか

らじやないぞ。早く奴を退治しないとまたギャーギャー騒ぐからだ

！ それだけだからな！ とは宗助の言だ。

そんな彼の心情はともかくとして、宗助は先ほど葉月が言つていた冷蔵庫の隙間を覗いて見る。さすがにあれから時間が経っているので奴ことGはすでにその場所から姿を消していた。

どこに行つた？ 奴の移動速度は尋常ではないが、あれだけの時間だったらまだどこかに潜んでいてもおかしくはない。

冷静に分析を繰り返しながら宗助はくまなくGが隠れそうな場所をそれこそ風つぶしに探ししていく。

けれども、その姿は一向に見つけることは出来なかつた。諦めてその場を離れようとすると「あううう！」と、リビングのほうから聞きなれた叫び声が聞こえた。

一目散に声のしたほうへと足を向けると、葉月が黒い物体に追いつけ回されていた。

「……大丈夫か？」

「そ、そ、そ、そ、そ宗助さん！ 助けてください！ 奴が、奴が葉月を狙つてます！」

「見ればわかる。それよりもなんか楽しそうだな」

「楽しくなんかないですよ！ なにを見てるですか宗助さん。早く助けてくださいです！」

「助けるつつつてもな…… そう飛び回っていたんじゃ退治しようがないぞ」

確かに宗助の言つとおり、地面に止まつてゐる物体ならばともかく、飛び回つてゐる物体を叩き落すといつのはかなりの技術が必要となる。物理的に考えてその飛行してゐる物体よりも速い速度でなければその物体を叩き落すことは出来ないし、何より相手が自由に動き回るならばなおさらだ。どう考えたつて無理な話だ。

しかし、宗助はやれやれといつものように首を振ると手にしていたSBS-01を握り締める。

そして……。

すば ん！と小気味のよい音が響き渡る。ついでに「あう

う！」という声までついてきた。

飛び回るGを狙つたつもりがどういづわけか葉月のほうにヒットしてしまつたらしー。

「 ちつ、仕留めそこなつたか」

「そ……宗助さん……それは葉月のことでしょうか……」

今にもあつち側へと逝きそうな葉月をよそに宗助はもう一度SB S-O-1を振る。

パシイ！

「ひいーー！」

ビュンッ！

「ひやうう！」

ビュオン！

「ノオオオオオ！」

「すばしつこい奴め。じつとしでるー！」

「嫌です！止まつたら葉月は殺されちゃいます！」

「大丈夫だ。お前はすでに死んでいる。だから何も氣にするな！」

「気にしますですよ！ 死に方がひでぶ！ とかあべし！ とか嫌なのですよ！」

もう一人にとつてはなにがなんだかわからなくなつっていた。宗助もといGに追われる葉月、その葉月もといGを仕留めようとする宗助、互いに本来の目的なんか忘れて走り回つていた。

そこから一時間後……。

「 はあ はあ はあ 」

「 ひゅう ひゅう ひゅう 」

大の人が一人そろつてリビングで仰向けで倒れていた。

「 なあ 俺は一体何をやつてるんだるうな せつかくの休みだつてのに……」

「 それは葉月も 同じです 結局 奴を逃がしてしまい

ましたです……」

せつかくの休日が何をしていたのかよくわからないまま過ぎていこうとしていた。

「…………うおおお…………体がいてえ…………つか、レポート仕上げなきゃいけないのに……」

「…………そ、宗助さん…………ファイトです…………うう…………」

そしてその日は一人揃つてぐつたりしたまま過げることとなってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465ba/>

俺と半透明な彼女の日常

2012年1月5日21時48分発行